

# 小松島の埋蔵文化財

岡本 和彦\*

**要旨：**小松島市域の埋蔵文化財に関して、これまでの記録や遺物等から、その一端を紹介したい。

**キーワード：**埋蔵文化財、遺跡、遺物

## 1. はじめに

埋蔵文化財とは地下に埋もれた文化財のことを指す。土地に刻まれた人類の痕跡が遺跡で、不動産的なものが遺構であり、動産的なものが遺物である。

小松島市域では、縄文晩期から近世までの遺跡が確認されている。埋蔵文化財に関するこれまでの記述を少しみしていくと、

### 1) 守住貫魚（子安観音塚古墳）

徳島藩の御絵師である守住貫魚は寛永7年（1630）に阿波国田之浦村（現・小松島市田浦町）

で出土した短甲を描いている。徳島県立博物館（以下、県博）蔵の『阿波国勝浦郡田之浦村掘出古甲図（以下、古甲図）』（写真1）がそれで、長らく絵図の存在だけが知られていたが、小松島市教育委員会（以下、市教委）の収蔵品の中に同一個体と思われる金銅装の甲冑片（写真2）が再発見され、小松島市指定文化財となっている。

甲冑片には、『古甲図』に描かれた三角板鎧留短甲の一部に加え、金銅装の胄（小札鎧留の胄側面と鎧の一部）も含まれる。胄・短甲ともに総金銅装と分類されるもので、他のセットでの出土事例は、

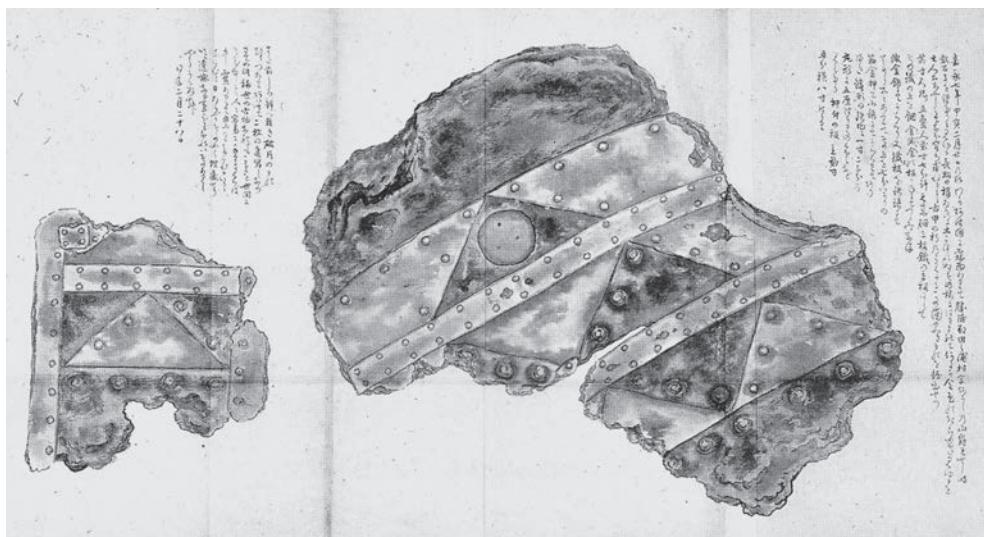


写真1 守住貫魚『阿波国勝浦郡田之浦村掘出古甲図』 徳島県立博物館蔵

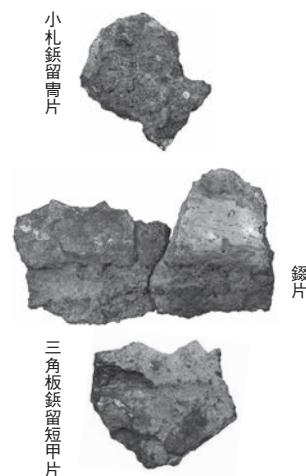


写真2 小松島市指定文化財  
「鉄地金銅装甲胄片」  
小松島市教育委員会蔵

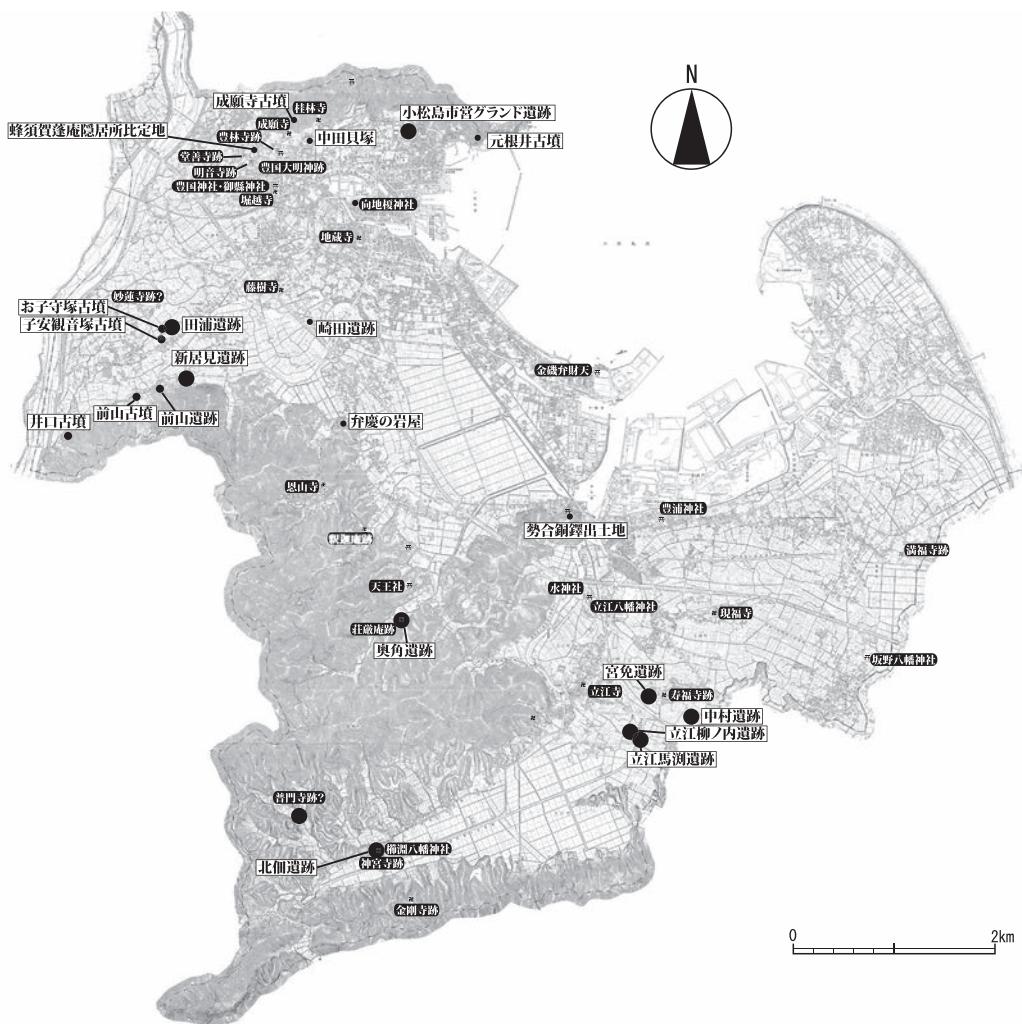


図1 小松島市における遺跡等の位置 小松島市全図 1/10,000に加筆

同じく絵図の残る大仙陵古墳（伝・仁徳天皇陵）前方部石室出土の金銅装甲冑（明治5年出土、再埋納。）のみである<sup>2)</sup>。『古甲図』の詞書<sup>3)</sup>は以下のとおりである。

「嘉永七年甲寅二月廿日の比同日阿波国に霖雨ありて勝浦郡田之浦村字何かしの山崩れせし時數百年を経たりと見ゆる長松の根あらはに土こぼれぬその根にはさまれて何か金色のきらめき見ゆるを土人等あやしみてなほ穿ち求むるに古甲の朽のこりたるこの図の如きものを掘出せり其寸尺凡ソ立壱尺貳寸七分計元來胴三枚鐵の立板にしてその鐵の上を銅金滅金の板かねにてつゝみなほ滅金鉢にてからくり又鐵板を鉄鉢にてとめし所もありてその上を七分はかりの筋金押て小鉢にてからくりてありまた鱗形の鉄地に一寸二三分の丸形に五厘ばかりのくほみなど見えたりか押付の板立貳寸五

分横八寸はかりまた前うしろ辨へ難き破片のものひとつありあはせて二枚の真寫しなりさて如此稀世の古物なれどもこれを世間により出して人々容易に手まさくらばもし靈ありて祟りたらむはいかがならむと日あらずもとの如く埋蔵せりいと遺憾なる事どもなればそのありしやううつし拝同年二月二十八日」。

古甲の出土地等は明確に記されていないものの、この再埋納された金属片の一部はこの後も何度か現れたとみられ、その際に出土したものが、現・中央会館の前身にあたる中央公民館<sup>4)</sup>に保管され現在にいたると考えられる。このことは、以下の記述からも窺い知ることが出来る。

・『勝浦郡志』（上編16頁）：（抜粋）「田浦（中略）同地の子安庵の本堂昇降段の西側に大松があつたが明治十三年の八九月頃に大風が吹いて倒れたと

- き根元から澤山の刀剣甲冑の金具類が出て來た」。
- ・『小松島市古代文化のあと』(3頁)：(抜粋)「明治十三年、田浦觀音寺(児安)西側の松が暴風雨で倒れた。其根元から、数振りの刀剣及甲冑の断片が現れた」。
  - ・『小松島市史(旧小松島町の卷)』(4, 26頁)：(抜粋)「子安庵子安庵地は、一つの砂丘であるが、周囲の状況から考えると、人工的に築き上られたもので、北方えは、今よりも少し広がりをもつていた。この方面的土砂は児安校の敷地を築くために運びとられたものであるが、たしかに立派な古墳であつたらしい。刀や鎧などの断片が多量に出土した。」(抜粋)「子安庵明治二十四五年の頃暴風雨のため西側の松が倒れた。その松の根元から十数振の日本刀とよろい、甲等が現れた。よろ振〔よろいか〕の胴には金の紋さえあつた。(中略)地方の人達祟りを恐れてこれを共に埋め、その上に供養の塔を建てた。その所より出土した鎧の破片は現在公民館に在る」(〔〕内は筆者補注)。
  - ・『小松島市史 風土記』(335, 336頁)：(抜粋)「子安庵 明治二十四、五年の頃暴風のため西側の松が倒れた。その松の根元から十数振りの日本刀とよろい、かぶと等が発掘されたという。よろいの胴には金の紋さえあつた。(中略)これを共に埋めて、その上に供養の塔を建立した。その所から出土した鎧の破片は現在中央公民館に保管している」。

## 2) 鳥居龍蔵(弁慶の岩屋・中田貝塚)

明治21年(1888)に19歳の鳥居龍蔵が『東京人類學會雑誌三十三号』に投稿した「阿波國勝浦郡芝生村岩屋の話」が芝生町に所在する現・徳島県指定史跡「弁慶の岩屋」(昭和28年指定)と考えられている。その後、大正11年(1922)3月30日に「美馬郡・三好郡調査、穴吹から汽車で小松島の中田に行き、千代松原の東八幡神社裏の貝塚を調査」と強行日程で中田貝塚を訪問した記録<sup>5)</sup>も見える。

## 3) 喜田貞吉(成願寺古墳)

本市櫛渕町出身の喜田貞吉は大正12年『社会史研究』第9巻第5号において今は滅失している中田町に所在した「天王山裏山古墳」として「成願寺古墳」について次のように記述している。

「成願寺の本堂の後方の山を上って、裏手へまわ

ると、急な山の斜面を畠に拓くの工事半ばだ。この工事のさいに古墳(阿波國勝浦郡小松島町大字中田)は偶然発見されたので、破壊されて、左右と後方との三側壁のみを遺している。墳の縦約七尺、横四尺余、深さ二尺五寸ばかりの小さなものだが、その内部の様子は、普通の縦穴式箱形の、板石で囲んだ、いわゆる阿波式石棺なるものと同様でありながら、これは長さ二、三尺、小口七、八寸から尺余の大石を横にして、小口を墳壁にあらわし、石垣風に積み重ねて造ってあると、その墳の幅の比較的広いのが珍らしい。蓋石はかつて除去せられたものと見えて存在せず、古代にいったん発掘の難に遭ったものらしいが、しかもその土中からは、出雲石の曲玉四個(?)、瑪瑙の曲玉二個(?)、水晶の切子玉一個、出雲石の管玉二個、刀剣の破片二個、高坏・蓋坏・壺等、種々の朝鮮式陶器(いわゆる祝部土器)の破片が多く発見されたそうな。その墳底には砂利や貝殻を敷いてあつたらしく、そこらあたりに散乱している。あるいは貝殻は死者の供物であったのかも知れぬ。こんな品々が今まで多く遺っているのを思うと、往事発掘されたさいにはただ天井の蓋石を取ったのみで、その下は流れ込んだ土で埋まっておったので、遺物の所在までは掘ってみなかったのかも知れぬ。この附近には二十年ばかり前にも、一の古墳が発掘されたそうなが、どんなものであったか、今は跡方もなく、詳細を知ることが出来ぬ」。

『勝浦郡志』(上編15, 16頁)でも同様の記述がある。

(抜粋)「山畠開墾の為に大正十一年十二月廿八日 大石棺古墳發見せられた」と發見日は詳しく書かれている。また蓋石に関しても「蓋石は何時頃取去られしかと云ふことは不明なれども中田西八幡〔現在は建島神社へ合社〕の石ノ鳥居の所より中田驛へ行く途中の小川に架せる石橋〔現在の桜馬場橋付近か石橋は現存しない〕は石質等考察すれば或は此古墳のそれを使用せしにあらずやと云ふ或は然らん果して然らば此の古墳の包土が雨水等の為めに流し去られ巨石の露出せしより石橋に使用することになりしならん」と推測しており、墳丘形状に関しても「此地は傾斜地なれば圓墳の頂上よりは墳脚は西手が長かつたは明白」との記述がみられる。

『小松島市古代文化のあと』(3・4頁)には、(抜粋)「大正十一年頃、中田成願寺裏山の西側の麓で(中略)縦二米横一、二米深さ八〇釐の石室の中から出雲石メノー水昌等の勾玉、刀剣高つきつきミカの破片等出土、今はあとかたもない。」や「大正十年頃、中田成願寺裏山堅穴古墳から勾玉、須恵器、金管寺〔等か〕出土した。(中略)又石材は成願寺の庭に残っている」との記述がみられる。出土遺物の記述から、前者は喜田が実見した古墳と思われる。双方の出土遺物として記述のある勾玉等は所在不明ながら、石材に関しては成願寺敷地内に後者の古墳に伴うと思われる古墳の石材と口伝される結晶片岩製板石(3.2m×0.8m×0.2m, 3.1m×1.1m×0.2m)がみられる(写真3)。



写真3 成願寺古墳石材力 成願寺

#### 4) 笠井新也(中田貝塚)

大正11年の『阿波國貝塚概説』(57・65~66頁)で中田貝塚に触れている。「序説(抜粋)然るに本年の三月に至って、笠井藍水氏が勝浦郡小松島町大字中田に於て始めてこの種の貝塚を發見し」とあり、「二貝塚各論(抜粋)一一中田貝塚 笠井藍水氏の發見に係る。遺蹟は小松島町の北方、日峯山麓に近い沖積地にある。海岸を距る約十二町、海拔3米突の地點にある。廣さ二三畝、地下約一尺にして貝層に達し、層の厚さ五寸乃至一尺に及ぶ。貝ははまぐりが主で、その他かき・しほふき・はいがひ・あさり等を混じてゐる。遺物は比較的古式の彌生式土器の破片を出すが、尚徹底的に調査すればアイヌ式土器をも發見するかもしれない。ともかくもこれまで發見の貝塚中、城山々麓のそれに次いで古い遺蹟であることは推定するに難くない。但し石器とし

ては、サヌカイトの破片が少量發見されてゐるのみで、未だ石器と稱すべき程の石器は發見されていない。」との記述がある。

『小松島市古代文化のあと』(1頁)には、「中田千代ヶ原 中田八幡神社の裏を北へ進むと、細川神社がある。もとこのあたり百数十坪余りの地域は、地表から十数釐位の下から蛤カキ等の貝殻が大量にあつた。大正五年頃鳥居博士によって發見されたものでサヌカイト、網のおもり石、弥生式土器の破片が出土した。現在は土砂採取の為貝殻は残つていなさい。」と記述があるものの鳥居がどこまで関わっていたかは定かではない。現在、細川神社は桂林寺敷地内へ移転している。

同じ中田町で東に位置する小松島市営グランド遺跡(以下、グランド遺跡)では令和3(2021)年度に市教委が実施した発掘調査において自然貝層が検出されている。ハマグリ・ハイガイ・アサリは出土しているものの、出土した貝はイセシラガイ・カキが主となっていて組成は異なる。また検出された深度も違うがサヌカイト片や弥生土器の出土など共通点も多い。大正5年当時の程度の調査が行われたか不明であり、出土遺物も現存していないことから自然堆積の貝層と貝塚の見極めは難しい。

#### 5)『小松島市史 旧小松島町の巻』(5頁)

「(元根井古墳) 沖神社の上方の一本松のある所、即ち魚の色見松の附近にも古墳があつて、明治の終わり頃に発掘された。現存しているものは幅二尺位長さ五尺位の石室の蓋石と、側石が三枚あるのみで、当時は底石には沢山の朱がついていたとの事である」と記述があり、写真(写真4・5)も掲載さ



写真4 元根井御番所あと及び山上の一本松  
『小松島市史 舊小松島町の巻』掲載写真をトリミング・補正

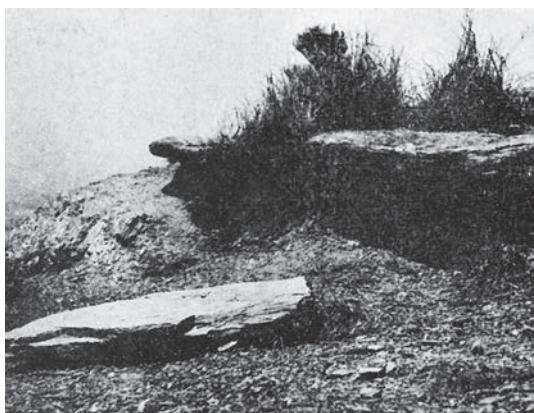


写真5 元根井山上一本松附近の石棺蓋石 写真4と同じ

れている。現在の小松島灯台のある付近と思われるが、石材などは見受けられない。

## 2. 埋蔵文化財の発掘調査

遺跡の学術的な発掘調査は、昭和37年（1962）に関西大学が実施した田浦町の前山古墳が最初である（徳島県教育委員会編 1963）。前山古墳の発掘当時の写真是、発掘調査にも関わった森浩一の資料（同志社大学歴史資料館蔵）に確認できる。平成以降になつて開発対応の記録保存のため、徳島県教育委員会・徳島県・公益財団法人徳島県埋蔵文化財センターによる調査や小松島市教育委員会による発掘調査が行われている。

発掘調査が実施された主な遺跡は以下の通りである。

中村遺跡（大林町）平成8年度

崎田遺跡（日開野町）平成9年度

立江馬淵・柳ノ内遺跡（立江町）平成14年度

宮免遺跡（大林町）平成15・16年度

新居見遺跡（新居見町）平成21年～令和2年度

田浦遺跡（田浦町）平成24年～27年度

奥角遺跡（田野町）平成22年度

北佃遺跡（櫛渕町）平成28年度度

小松島市営グランド遺跡（中田町）

令和元年～4年度

お子盛塚古墳（田浦町）令和3年度

## 3. 各時代の遺跡・遺物

### 1) 縄文時代

縄文時代の遺構は新居見遺跡の一部で検出されて

おり、凸帯文土器と呼ばれる縄文晩期の土器や石器とともに当時県内では初めて土偶（写真6）が出土した。土偶は分割塊製作法で作成され胸部と脚部・腕部を含む胸部が別のパートであったことが分かる。また、胸部中心線には復元径8mm程の円柱状の孔の痕跡がみられることから、頭部との接合は芯棒接合式が用いられている。腹部の凹みにはベンガラが遺存し、腕部の胎土分析<sup>6)</sup>の際にもベンガラが確認されており、広い範囲に着色された可能性がある。凸帯文土器や石錘はグランド遺跡でも出土している。

写真6 土偶（新居見遺跡）  
左腕：小松島市教育委員会蔵  
下半身：徳島県立埋蔵文化財総合センター蔵

### 2) 弥生時代

弥生時代の遺物は小松島市域から多く出土しているものの、未だ集落跡は確認されていない。前期の遺物としては市教委の収蔵品の中に「向地榎神社」と墨書きされた弥生土器壺の底部（図2）がある。昭和28年（1953）に立江町字赤石の勢合山裏山の竹藪開墾中に中段階・扁平鉢式六区袈裟襷文銅鐸（県指定有形文化財）が出土している。海に面した埋納位置<sup>7)</sup>から海上交易に関わる銅鐸と考えられている。田浦遺跡では後期と思われる多孔式（6孔・7孔）の在地産有孔鉢（図3）が出土している。県下出土の有孔鉢は単孔のものが多く、多孔式の出土例は黒谷川郡頭遺跡（3孔）などでみられるが、地域性の出た土器といえる。一説には酒の醸造に使用されたとも考えられている。

### 3) 古墳時代

古墳時代初頭の遺物はグランド遺跡などで出土している。中期になると田野山地北麓に前山古墳が築造される。その後、平地では前記の甲冑片の出土地と考えられる子安觀音塚古墳や埴輪列（写真7）が確認されているお子盛塚古墳<sup>8)</sup>が築造され、隣接する田浦遺跡の流路跡からは後に律令期になり廃棄された両古墳のものと思われる埴輪が出土している。



写真7 お子守塚古墳・埴輪列 小松島市教育委員会

稀少性の極めて高い金銅装甲冑の存在は、5世紀半ばにこの地が四国における枢要の地であったことを示している。また新居見遺跡では、発掘調査により墳丘が削平され周濠のみ遺存する円墳等が確認されている。古墳は一部に下限が中期以前と思われるものも含まれるが、概ね6世紀～7世紀にかけての墳墓群である。

後期に入ると前述した前山古墳の一つ東側の尾根上に形成された前山遺跡において、子持勾玉（図4）や多くの埴輪が出土しており、田野山地北麓西端の

田浦町井口からも埴輪等が同様に開墾時に出土している。その構成の中には石見型埴輪（図9・10）が含まれている。石見型埴輪は奇しくも喜田貞吉が、「隨筆目録」昭和8年4月／『歴史地理』第62巻第2号の中で「直弧紋を描出した盾の埴輪」として興味を示した埴輪である。現在は儀仗<sup>ぎじょう</sup>との説もあることから、盾形ではなく出土した石見遺跡から石見型と呼ばれることが多い<sup>9)</sup>。喜田は奈良県の古社寺技術室に陳列してあった石見からの出土品を見学し記しているが、その後、出身地の小松島<sup>10)</sup>から同様の石見型埴輪が出土することは想像もしていなかったであろう。

終末期には、石室規模・構造等から被葬者は周辺を治めた首長と考えられる弁慶の岩屋（横穴式石室が露呈）が田野山地東麓に築造される。この周辺からは玉類（県博蔵・写真8）等も出土しており、複数の古墳が築造されていたと考えられている。



写真8 玉類 德島県立博物館蔵

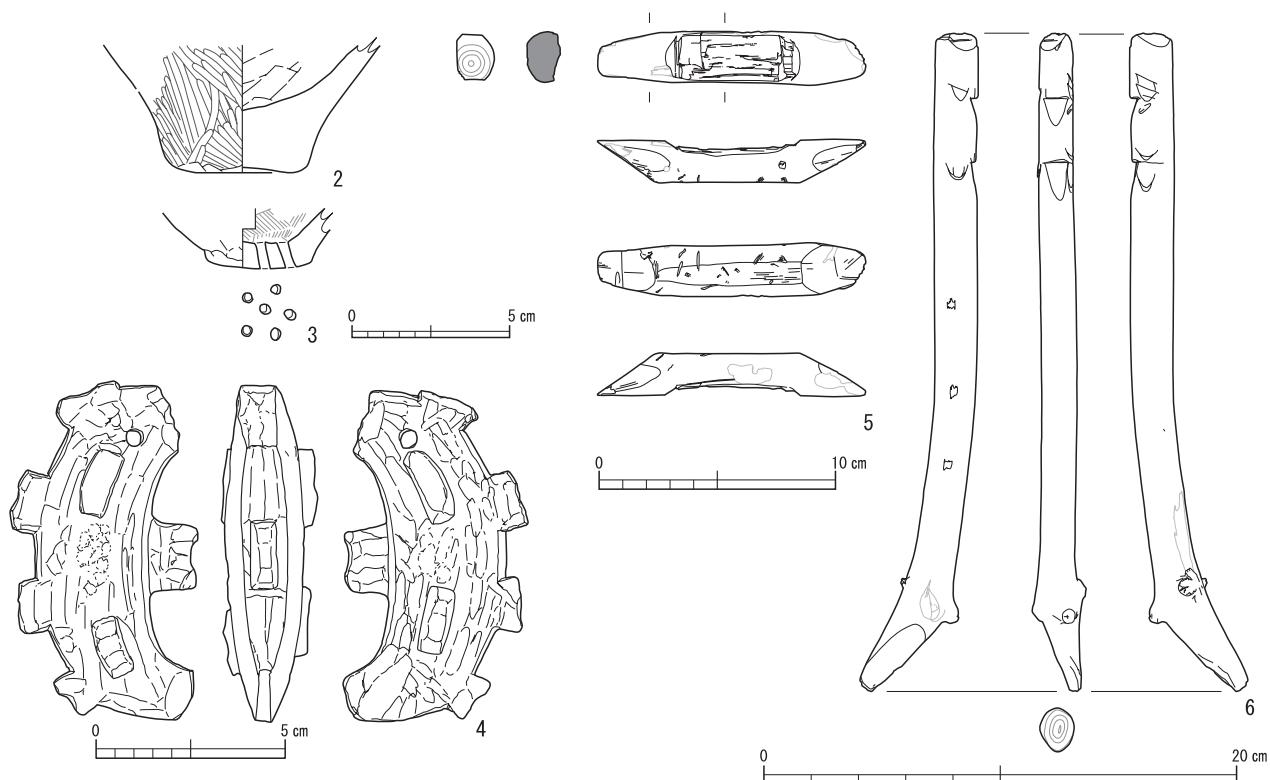


図2～6

#### 4) 古代

古代の遺跡は、飛鳥時代では立江馬渕遺跡等で確認されている。立江馬渕遺跡の流路跡からは、舟形・人形・斎串等の木製祭祀具が出土している。北畠遺跡では竪穴式住居跡の一部が検出されている。奈良時代では、田浦遺跡で水田区画が検出されており、平城京出土木簡の中には「阿波國長郡坂野里」と書かれたものが2点出土している。グランド遺跡では、舟形(図5)・人形(図6)<sup>11)</sup>・斎串等の木製祭祀具や製塩土器も出土している。平安時代では立江馬渕・柳ノ内遺跡で掘立柱建物跡群が検出されており、出土した円面硯や石帶具、緑釉陶器<sup>12)</sup>等から、官衙(古代の役所)関連の遺跡と考えられている。その他、新居見遺跡では大型溝に区画された集落跡が検出されている。日開野町の藤樹寺からは第二次世界大戦後に境内から平安期の軒丸瓦(図7)が出土している。

#### 5) 中世

中世段階では田浦遺跡の北部で13世紀前後の屋敷地2区画と掘立柱建物跡11棟、L字形に配置された井戸4基などが確認されている。奥角遺跡では13世紀後半～14世紀頃を中心とした集落が営まれ、中世寺院跡とされる莊嚴寺跡が所在し、同寺院の関連施設とみられる莊嚴庵があったと伝承される地域である。新居見遺跡では、室町時代の名主層のものと思われる屋敷地が複数確認され、完形の青磁碗が副葬された土壙墓等も検出されている。北畠遺跡は、石清水八幡宮領櫛淵荘に関連する神宮寺跡に伴う遺跡で、軒丸瓦や軒平瓦等が出土している。グランド遺跡では、こけら経等も出土している。中田町字狭間での一般住宅建設工事の際に実施した工事立会では、柱穴や人工溝等の遺

構と共に瓦器椀(図8)

等の13世紀頃の遺物が出  
土している。旧字・堂善  
寺古屋敷と呼ばれる地域  
であることから『阿波志』

<sup>13)</sup>に桂林寺の末寺として  
名があがる「東善寺」に  
関連する可能性が考えら  
れる。その他に寺院関連

では、櫛渕町字佐山の金剛寺跡<sup>14)</sup>は、櫛渕から阿南市羽ノ浦町へ抜ける街道筋の一つに立地し、文献等では近世段階以降の記録しかないものの、跡地には南北朝期まで遡る板碑(市指定文化財、令和2年指定)や五輪塔等が散見できる。

その他、櫛渕町では字湯谷で昭和37年に出土した備前焼大甕(写真9)が県博に寄託されている。砂岩製一石五輪塔と共に伴し中世段階のものとみられ、大甕底部からは「普門寺」と書かれた板も出土している。普門寺は『立江町史』(第1編29、30頁)に、「(抜粋)「延寶八年櫛淵村新開検地帳に(中略)ふもんじ山藪」、「(抜粋)櫛淵村の北方の谷間に瑞雲寺址、普聞寺址がある(延寶八年検地にふもんじ藪すいうん)」と記述がみられる。

坂野町の満福寺跡の周辺には「経塚」・「庵下」の字名が残り、永徳元年(1381)の紀年銘の入った鰐口(県博蔵・写真10)が出土し、「阿州南方坂野本庄満福寺…」と寺名も記されている。田村直一著の『花水木』に、経塚からの人骨や一字一石経の出土伝承とともに鰐口に関しても記述が見える。跡地には中世期の花崗岩製や砂岩製の石造物も点在する。また、中田町根井出土の埋納錢が県博に収蔵されている。備前焼の壺(写真11)に入った古くは開元通宝から、新しくは永樂通宝までの1,406枚で15世紀以降の埋納錢と考えられる。この埋納錢に関しては『小松島小学校百年のあゆみ』(25頁)の中に記述が残る。「根元井〔元根井か〕の古錢昭和二十五年五月十七日(中略)原野を開墾中に壺に入った古錢二千数百枚が出た。内容は中国の唐・宋・明の三代にわたる五十種内外の貨幣である。中には少数ながら朝鮮、安南の貨幣も交じている。」とあり、現存数



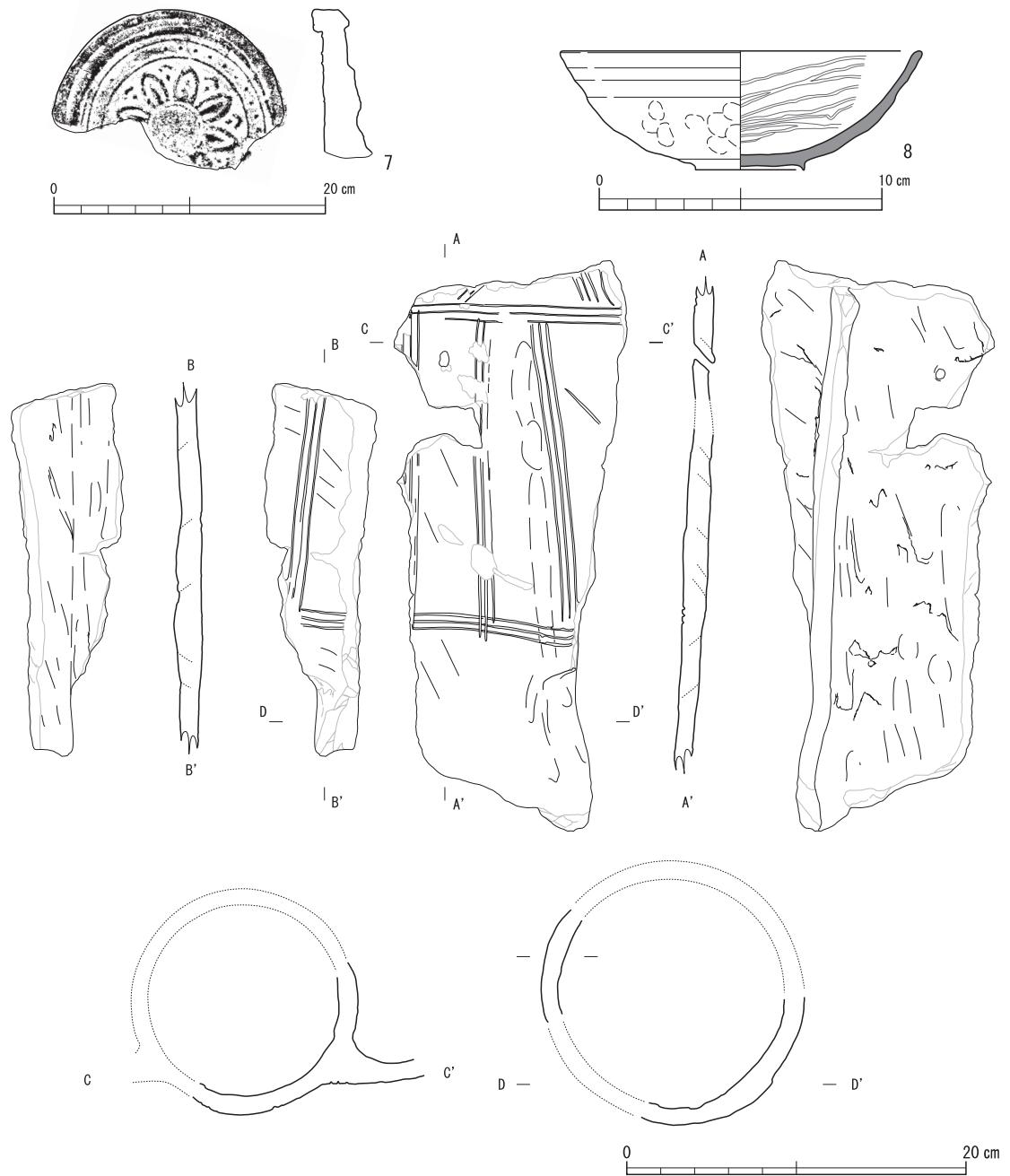
写真9 備前焼甕  
徳島県立博物館蔵



写真10 鰐口  
徳島県立博物館蔵



写真11 備前焼壺  
徳島県立博物館蔵



9 石見型埴輪 [田浦町井口]

図7～9

よりも600～700枚程度多く、朝鮮や安南の貨幣も含まれていたことがわかる。

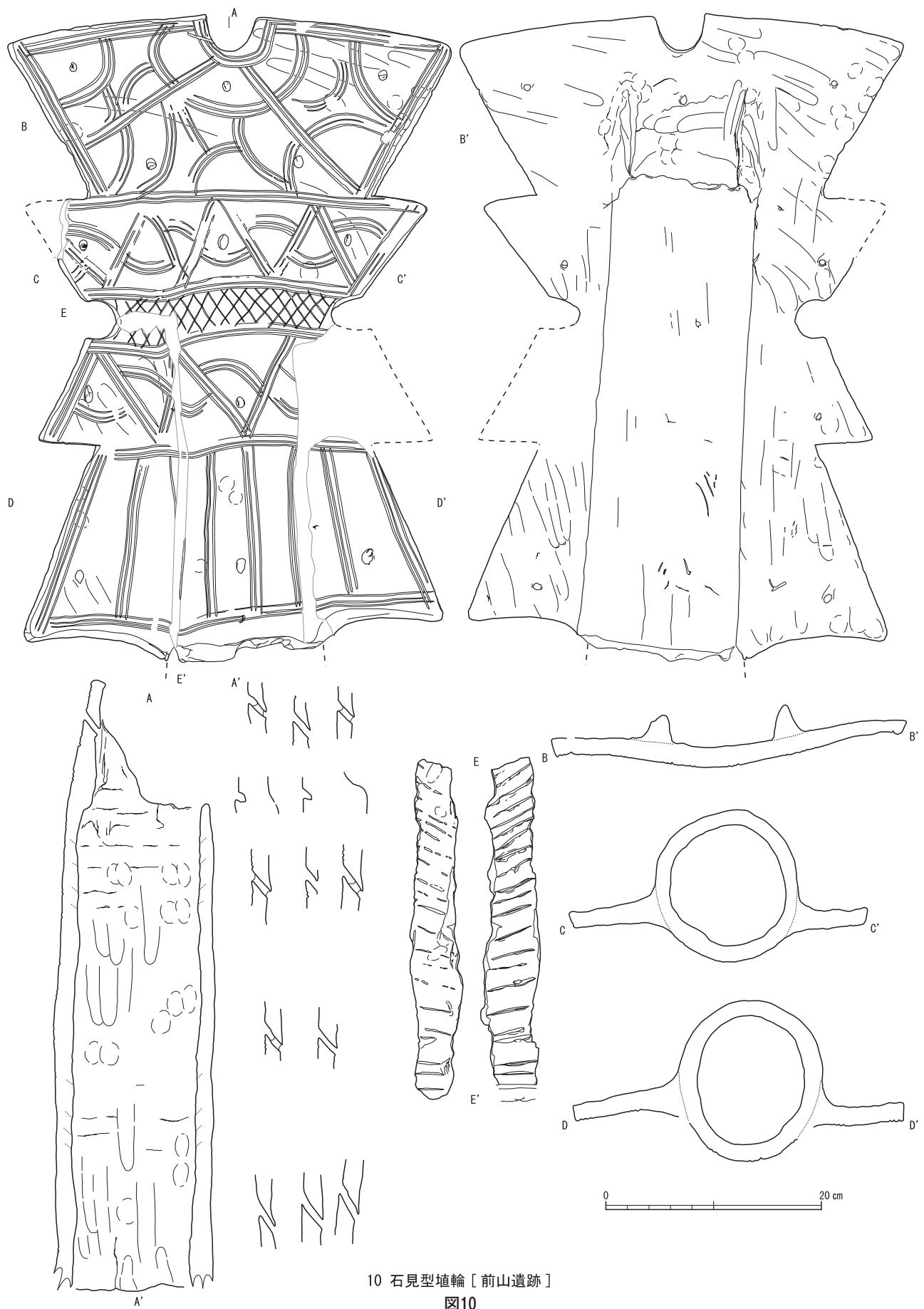
## 6) 近世

近世になると蜂須賀家政（蓬庵）が中田村（現・中田町）に別館を置き一時期居住した。また豊臣秀吉を祀った豊國大明神も慶長19年（1614）に同地に勧請されている。この豊國大明神に関する礎石はなかのこう中郷町の豊國神社に移設されたものと、千代小学校で灯籠の台に転用されているものを合わせ、現在18基が残っている。また、地蔵橋（徳島市）から小松

島へと入るルートである小松島街道沿いでは照蓮による道標が確認できる他、江田町付近で現在の側溝等が19世紀代の人工溝を踏襲していることが、市教委の工事立会等でわかっている。

## 4. おわりに

本稿は、埋蔵文化財に関する体制が整っていなかった時期の関連資料の紹介と近年の発掘調査成果を報告してきた。近年では発掘調査や地道な工事立会等で徐々に資料の蓄積が進みつつある。



10 石見型埴輪 [前山遺跡]

図10

## 註

- 1) 金銅装甲冑には部分的に金銅を施すものと全体的に装飾する純金銅装がある。
- 2) 堺市指定有形文化財「仁徳天皇大仙陵石郭之中ヨリ出シ甲冑之圖」個人蔵（堺市博物館寄託）
- 3) 詞書に関しては森脇佳代子氏にご教示いただいた。
- 4) 中央公民館には図書館が併設されており、小松島市生涯学習センターへ図書館が移転した際に甲冑片も同建物2階の収蔵庫に移されたと思われる。
- 5) 「徳島毎日新聞」大正11年（1922）3月30日。
- 6) 白石純「新居見遺跡・田浦遺跡出土遺物の胎土分析」小松島市教育委員会『新居見遺跡・田浦遺跡』（125～133頁）。
- 7) 銅鐸發見『立江町史』補遺（1頁）
- 8) 『勝浦郡志』では「お小森さんは古墳でないようである」と否定的な記述であるのに対し、『小松島市史（旧小松島町の卷）』では「明治年間土管様のものが、沢山埋もれていた」との記述から円筒埴輪の存在を伺わせている。市教委が令和3年度に実施した市道田浦2号線道路工事に関連した調査で埴輪列を確認、古墳であることが証明された。
- 9) 西藤清秀（1992）「木製樹物」、『古墳時代の研究』第9巻、（155頁）、雄山閣。
- 10) 厳密には櫛渕町を含む立江町と小松島町の合併は昭和26年。
- 11) 小松島市営グランド遺跡出土（令和3年度調査）の木製祭祀具の一部。人形は立体的で自然木の上端を山形にカットし顔を上下に並べたものが大多数を占める。
- 12) 阿波国府以上の出土量と質で、印刻花文と呼ばれるグレードの高い物も含まれる。
- 13) 『阿波志』「勝浦郡佛利桂林寺」
- 14) 長宗我部による阿波侵攻の際に櫛渕城攻めの本陣が置かれた場所との伝説も残る。

## 引用・参考文献

- 阿波学会・徳島県立図書館編（1969）：『総合学術調査報告 小松島郷土研究発表会紀要』第14号。
- 石尾和仁（2013）：特集「鳥居龍藏と城山貝塚調査」にあたって、3頁、『徳島県立鳥居龍藏記念博物館研究報告』第1号
- 岡本和彦・白石純・橋本達也（2015）：『新居見遺跡・田浦遺跡』小松島市教育委員会。
- 岡本和彦・福家清司（2017）：『北佃遺跡』小松島市教育委員会。
- 笠井新也（1922）：阿波國貝塚概説、『阿波名勝』第二號。
- 勝浦郡教育委員会編（1923）：『勝浦郡志』。
- 喜田貞吉（1923）：『社会史研究』第9巻第5号、『喜田貞吉著作集』第14巻、六十年の回顧・日誌、471-472頁、1982、平凡社。
- 喜田貞吉（1933）：『隨筆目録』昭和8年4月／『歴史地理』第62巻第2号、『喜田貞吉著作集』第14巻、六十年の回顧・日

誌4、89頁、1982、平凡社。

櫛渕公民館編（1990）：『櫛渕町史』。

久保勝美朗（2005）：『立江馬渕遺跡』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター。

栗林誠治（2013）：『阿波勝浦郡芝生村岩屋ノ話解題』、鳥居龍藏を語る会編、『鳥居龍藏研究』第2号。

栗林誠治（2014）：『勝浦川流域における前・中期古墳の動態』、考古フォーラム蔵本『青藍』第10号。

栗林誠治（2018）：『新居見遺跡（I）』徳島県教育委員会・公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター。

栗林誠治（2021）：『新居見遺跡（II）』徳島県・公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター。

小松島市教育委員会編（1964）：『小松島市古代文化のあと』。

小松島市教育委員会編（2020）：『小松島市の文化財』。

小松島市史編纂委員会編（1977）：『小松島市史 風土記』。

小松島市・長国の埋蔵文化財実行委員会編（2018）：『長国の埋蔵文化財5周年記念図録』。

小松島市役所編（1952）：『小松島市史（舊小松島町の卷）』。

小松島小学校創立百周年記念事業協賛会編（1973）：『小松島小学校百年のあゆみ』。

西藤清秀（1992）「木製樹物」、『古墳時代の研究』第9巻、雄山閣。

齋藤普春（伊豆廻舎藏版）（1870）：『阿波志料櫛淵八幡神社考全』。

佐野山陰（1815）：『阿波志』（国立国会図書館所蔵阿波国文庫本）

菅原康夫（1988）：『日本古代遺跡37徳島』保育社。

菅原康夫（2019）：『阿波・勢合銅鐸とその周辺』、『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社。

須藤茂樹編（2021）：『小松島の歴史と文化—阿波地域文化の特質—』。

田村直一（1995）：『花水木隨想郷土誌』。

徳島県教育委員会編（1963）：『前山古墳』徳島県文化財調査報告書、第六集。

徳島県教育委員会編（2011）：『徳島県の中世城館』。

徳島県立博物館編（2009）：『生誕二百年守住貫魚—御絵師・好古家・帝室技芸員—』徳島県立博物館企画展図録。

徳島考古学論集刊行会（代表 天羽利夫）編（2002）：『論集徳島の考古学』。

鳥居龍藏（1888）：『阿波勝浦郡芝生村岩屋の話』、『鳥居龍藏全集』第4巻、522-524頁、1976、朝日新聞社。

那賀郡立江町編（1935）：『立江町史』。

橋本達也（2013）：『祇園大塚山古墳の金銅装眉庇付冑と古墳時代中期の社会』、上野祥史・国立歴史民俗博物館『歴博フォーラム祇園大塚山古墳と5世紀という時代』。

湯浅利彦（2017）：『徳島市城山貝塚発掘調査の復元的研究（上）—鳥居龍藏等による1922（大正11）年発掘調査の出土遺物の様相』、6頁、『徳島県立鳥居龍藏記念博物館研究報告』第3号

Buried cultural property of Komatsushima

OKAMOTO Kazuhiko\*

\* 9-19, Shinko, Komatsushima-cho, Komatsushima City, Tokushima, 773-0001, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.64 (2023), pp.119-128.